

「中学生探偵日記」

古堅元貴

【あらすじ】

千葉・流山。年末から、この街ではグラフィティアートで描かれた落書き事件が、多発していた。

年明け。中学3年生にとっては残り二か月で卒業の中、流山中学校に転校してきた野呂唱（15）。しかし既に出来上がっているクラスの中では、全く馴染めずにいた。

隣の席の清原ゆうみ（15）と、授業の際のペアワークで喋るのが、唯一の学校内での会話。しかし、クラスメートに全く心を開かないゆうみと、距離が縮まる事はなく、日々は過ぎていった。

だが、「昼休みは誰の目も気にせず、机に突っ伏して寝る」、「給食の時間は、誰とも話さず、黙々と食べていても気にならない」などの共通点が分かり、2人はペアワーク以外でも少しだけ喋るようになった。

ある日、校門横に突如描かれたグラフィックアートの落書き。さらにそこに描かれた絵の通り、ある場所で放火事件が起きた。「予言の落書き」として、盛り上がる市内の人々。

そんな中、ゆうみが犯人の犯行現場を目撃してしまい、怪我を負う。さらに先日、ゆうみに告白してフラれた同級生の壮亮（15）が犯人だと、校内で噂が広まる。

もう一つ広まった噂。唱の父が探偵であること。だがこれは真実。しかし、父が探偵なだけで、探偵になる願望は全くない唱。

「同級生が事件に巻き込まれ、犯人扱い・・・」

唱は、父にも協力してもらい「予言落書き事件」の捜査をはじめめる。当然、探偵スキルのない唱は、推理が全くできない。だが同級生のために犯人を捕まえたい。放課後や受験勉強の時間、全てを犠牲にし、唱はあるトンネル内を張り込み続けた。その結果、犯人の特定に成功

し、逮捕にまで繋げた。

同級生から人生で味わったことのない、尋常ではない感謝をされた唱。

卒業の日、唱は探偵になることを決めた。

【人物関係表】

野呂 唱	(15)	中学3年
清原 ゆうみ	(15)	中学3年
門間 壮亮	(15)	中学3年
伊沢 理久	(30)	教師
緒方 青	(25)	警官
野呂 警児	(50)	探偵 唱の父
高橋	(46)	会社員
漣	(15)	中学3年
凜太郎	(15)	中学3年
南野 恵	(50)	唱の母 警児の元妻

○ トンネル内（深夜）

壁に型紙を使って、様々なスプレーを噴射させている全身黒ずくめの人物。

× × ×

壁には、人が人を必死に追いかけているような、グラフィティアートの絵が描かれている。バンクシーにも似たテイストで、かなりのクオリティだが。

黒ずくめ「（嗚咽している）」

○ 清原ゆうみの部屋（朝）

1月7日。制服にスカーフを通して清原ゆうみ（15）。

壁掛けカレンダーの3月17日には、羽の生えたドクロが飛び立つ絵が描かれている。それを見ているゆうみ。

ゆうみ「・・・」

○ 通学路（昼）

学校に向かって、走っている野呂唱（15）。

唱「焦っている」

近くの工場から、正午のチャイムが漏れ聴こえる。

唱「（道に迷い）え、どっち・・・」

○ 通学路とトンネル内（昼）

頭を抱えている警官・緒方青（27）。壁には大きなグラフィティアートの落書き。

急いで学校へ向かっている唱。トンネル内に入ると、落書きに気づき、思わず足を止めると。

緒方「(唱に気づき) こんにちは」

唱「こんにちはは、あ!あの・・・流山中ってどっちですか?」

○ 流山中学校・外観(昼)

○ 3年1組教室(昼)

担任の伊沢理久(30)が、帰りのホームルームを行っている。生徒の中の1人にゆうみ。

伊沢「あと二か月少しで卒業です。31、いや32人全員が元気に卒業できるように、過ごしていきましょう。じゃあ、号令」

日直の生徒が号令をかけ、生徒たちが立ち上がる。

教頭「(扉を開け)伊沢先生」

伊沢「はい」

教頭の横には、汗だくの唱。

伊沢「(やっと来た・・・!)」

教室を出る伊沢。

教室内では「あれ転校生?」「初日から遅刻!？」

などとざわざわしている生徒たち。その中で、ひ

と際うるさい門間壮亮(15)。

黙って座っているゆうみ。

ゆうみ「(早く帰りたい)」

×

×

×

教壇。伊沢の横には唱。生徒と対面している。

唱「あ・・・野呂唱です。寝坊しました。すいません」

リアクションに困っている生徒たち。

伊沢「初日って緊張して寝れなくなってしまって、遅刻してしまうことあるよね」

唱「冬休みボケです」

教室内に変な空気。

伊沢「うん、そうなんだね」

唱「そうなんです」

教室内に変な空気。

ゆうみ「早く帰りたい」

○ 通学路（昼）

下校中。ひとり歩いている唱。途中、歩いていると、壁にグラフィティアートのような落書きを見つける。

トンネル内で見た落書きと、同一人物が描いたとみられる絵。

唱「・・・」

そこに自転車に乗り、巡回している警官・緒方が近づき。

緒方「学校、見つかった？」

唱「あ！はい、ありがとうございます」

緒方「よかった。もう帰り？」

唱「今日は始業式なので」

緒方「あーそっか。もしかして・・・転校生？」

唱「はい。なのに遅刻しちゃって」

緒方「じゃ後輩だ」

唱「え？」

緒方「僕、卒業生。流山中の」

唱「おお！先輩だ」

緒方「何かあればいつでも」

唱「はい。（落書きを指さし）あ、ここにも」

緒方「最近多くて、この落書き。同じ奴だよ」

唱「バンクシー（と呟く）」

緒方「ん？」

唱「あ、いや。引っ越し先が落書きの多い町ほど、萎える事無いです」

緒方「刺さるな・・取り締まり、頑張ります」

唱「はい！」

○ 公園（夜）

鉄棒に寄りかかっている壮亮（15）。

壮亮「周囲に誰もいないのを確認して」

鉄棒に手を掛けようとすると、公園を横切っている唱を見かける。

壮亮「（あいつ、今日の転校生だ）」

レジ袋を持って家に向かっている唱。辺りをキョロキョロしている。

壮亮「（あいつ何してんだ?）」

唱「（道に迷っている）」

○ 3階建てのアパート・入口（夜）

唱「（やっと着いた・・・）」

階段を上り、自身の自宅である203号室へ向かう唱。

○ 同・唱の自宅・リビング（夜）

帰宅する唱。テーブルには「仕事で帰るのが遅くなる。夕飯先食べて！すまん」の紙。おつりを紙の横に置く唱。

2つ買った弁当の一つを冷蔵庫に入れ、もう一つは食べる。

○ 流山中学校・外観（日替わり・朝）

○ 3年1組教室（朝）

授業中。ゆうみの席の隣には、唱。

英語教師「Please read in pairs」

隣の席の人と、教科書の英文の読み合わせをは  
じめる生徒達。

唱「あ、お願いします」

ゆうみ「小さく会釈」

× × ×

教科書の英文を読み合う2人。

唱「クツジュ？・・・ウ？・・・」

ゆうみ「Could you like」

ペアワークが終わり、どんどん座っていく周り  
の生徒たち。

唱「クツ・・・ジュウ？・・・で合ってる？」

ゆうみ「Could you like」

最後のペアになっている唱とゆうみ。  
皆の視線が2人に集まっている。

唱「(気にせず)クツジュウ？・・・」

ゆうみ「・・・うん、クツジュウ」

× × ×

理科の授業。ペアで実験をしている唱とゆうみ。  
三角フラスコ内の溶液の経過を観察している。

唱「(真剣に見ている)」

ゆうみ「・・・」

× × ×

音楽の授業。ペアになり、ギターで「Let it Be」  
の練習をしている唱とゆうみ。

唱「えっと・・・C(のコード)が・・・」

Cのコードをゆっくり弾くゆうみ。

唱「(たどたどしくCを弾き)で、次が・・・」  
ゆうみ「G」

唱「G・・・」

Gのコードをゆっくり弾くゆうみ。

唱「前の学校だと木琴やってたから」

ゆうみ「・・・」

またCのコードを弾く唱。

ゆうみ「いやG。それCになってるから」

唱「あ、Gか！Gね！・・・んGって？」

ゆうみ「・・・」

唱「この学校、ペアワーク多くない？」

ゆうみ「(心の中でため息)」

2人のやり取りが目に入る壮亮。

○ 流山中学校・外観(放課後)

帰りのホームルームのチャイムが鳴る。

× × ×

部活動へ向かったり、下校する生徒達。

○ 通学路(夕)

自宅に向かっていているゆうみ。途中、壁に描かれた

グラフィックアートの落書きが目に入る。

ゆうみ「・・・」

唱「あ、おう」

斜め後ろには唱がいる。

ゆうみ「(うわ、帰り道も同じ!?) (どうも)」

唱「帰りこっち？」

ゆうみ「え」

唱「いや！知りたいとかじゃなく」

ゆうみ「・・・」

唱「じゃあ、また」

去っていく唱。

ゆうみ「・・・」

○ ゆうみの部屋（夜）

受験勉強をしているゆうみ。壁掛けカレンダーの3月17日を見る。

ゆうみ「・・・」

○ トンネル内（深夜）

トンネル内の落書きを見ている全身黒づくめの人物。

○ 校庭（日替わり・朝）

サッカーの授業をしている1組の男子。

体育教師（男）「パス練習」

「ピッ！」ホイッスルの音でペアを作り、パス練

習を始める生徒たち。奇数で1人残った唱。

唱「（また2人組だ・・・）」

体育教師（男）「野呂さんは、先生とやろう」

唱「お願いします」

○ 体育館（朝）

バスケの授業をしている1組の女子。

体育教師（女）「パス練習」

「ピッ！」ホイッスルの音でペアを作り、パス練

習を始める生徒たち。奇数で1人残ったゆうみ。

体育教師（女）「清原さんは・・・（あるペアを指さし）

あそこの組入ろうか」

ゆうみ「・・・はく」

○ 大食堂（昼）

給食の時間。3年生全員がクラスごとのテーブルに分かれて食べている。

× × ×

黙々と食べているゆうみ。少し離れた位置に壮亮。漣（15）と凧太郎（15）と喋りながら食べている。

凧太郎「引退試合の時より、今日の方が調子よかったろ」

漣「それはガチよりのガチ」

壮亮「全然本調子じゃねえわー、現役だったらあと2点はドリブル突破で行けたわー」

壮亮、喋りながらさりげなくゆうみを見ている。

ゆうみ「黙々と食べている」

ゆうみから、少し離れた位置に唱。

ゆうみ、ちらつと唱を見る。周囲など全く気にせず、黙々と食べている唱。

ゆうみ「少し共感」

○ 3年1組教室（昼休み）

教室に戻ってくる唱。室内には数人の生徒。その中に、机に伏せて寝ているゆうみ。

唱「・・・」

× × ×

数分後。起きるゆうみ。ふと横を見ると、机に伏せて寝ている唱。

ゆうみ「少し共感」

再び机に伏せ、寝るゆうみ。

横並びで机に伏せ寝ている唱とゆうみ。

○ 流山中学校・外観（昼）

5時間目開始のチャイムが鳴る。

○ 3年1組教室（昼過ぎ）

国語の授業。寝落ちしている唱。

唱「（小さな寝息）」

ゆうみ「（赤ちゃん並みに寝るじゃん・・・）」

国語教師「隣の人と話し合っ。ヒアウィーゴー」

ペアワークをはじめめる生徒たち。唱が寝ている

ので、なんとなく教科書を眺めていると。

国語教師「（ペアワーク）やって下さい」

ゆうみ「寝ているので・・・」

国語教師「起こさないよ」

ゆうみ「・・・はい。（唱に）起きて」

起きない唱。

国語教師「もっと強く言いなさい！（大声で）ウェイク

アップ！」

目を覚ます唱。

唱「あ！？え、もう英語？今6時間目！？」

国語教師「・・・まだ5時間目の国語です」

クスクス笑う他の生徒達。

ゆうみ「（笑み）」

○ スーパーマーケット・店内（夜）

スナック菓子コーナーの棚を見ているゆうみ。

× × ×

レジで会計しているゆうみ。かこの中には、チョコ

コやガムが沢山入っている。

○ 同・出入口（夜）

エコバックに商品を入れ、店から出るゆうみ。すると出口で買い物を終えた唱と偶然鉢合う。

ゆうみ「うわ」

唱「あ」

○ 帰り道で通る公園（夜）

家の方向が同じなので、なんとなく一緒に歩くことになる唱とゆうみ。

ゆうみ「(唱の方を振り返る)」

唱「・・・俺も家こっちだから」

ゆうみ「・・・」

唱「・・・」

ゆうみ「(唱のレジ袋を見て) それなに」

唱「え、ああ今日の晩メシ」

レジ袋の中を見せる唱。

ゆうみ「(レジ袋を見て) サラダ買いなよ」

唱「弁当に付いてるよ」

唐揚げ弁当の小さなサラダスペースを強調する唱。

ゆうみ「1日分の野菜足りてないよ」

唱「1日分の野菜って両手3倍分だからね」

ゆうみ「そうなの?」

唱「無理だよ、食べるの」

ゆうみ「・・・(たしかに)」

唱「そっちは?何買ったの」

×

×

×

鉄棒に手を掛け、逆上がりをしようとする壮亮。

壮亮「(恐怖心でためらう)」

すると唱とゆうみが話しながら、歩いているのを目撃する壮亮。

壮亮「……」

○ 通学路、ある小売店（深夜）

辺りを気にする黒づくめの人物。人通りがないことを確認。周囲に防犯カメラが無い事も確認。シャッターにグラフィティアートを描き始める。

× × ×  
翌朝。店のシャッターに大きな落書き。

× × ×  
落書きをされた店の店主に聞き込みをしている緒方。

店主「防犯カメラ無いのよー、防犯ステッカーは貼ってあるけど」

緒方「ステッカーでは、もう防犯になる時代じゃないっすよね」

店主「そうよーむしろ防犯カメラはないから、ステッカー貼ってますよ、って言ってるようなものよ」

緒方「そんな悲しい事、言わないで下さい」

店主「悲しいわよ！こんな落書きされて。すごくアーティストイックな描き方なのが、またなんとも……」

緒方「こういうのはアーティストイックとは言わないですよ」

店主「言っていないわよ！落書きにしてはって意味ですよ！こんな落書き認めるわけないでしょ！犯人捕まえてよ！」

緒方「すみません……」

少し離れた所から、自転車を止め、落書きを見ている野呂警児（50）。

警児「……」

○ 3年1組教室（朝）

朝のホームルーム前。自席で自主学習をしているゆうみ。唱、登校してきて。

唱「おはよう」

ゆうみ「・・・おはよ」

直後、ゆうみの前へ来る壮亮。

壮亮「清原さ、放課後空いてる？」

ゆうみ「え、なに」

壮亮「話しあつてさ、あの」

ゆうみ「え、なに」

壮亮「それをね、放課後に」

ゆうみ「え、ほんとなに」

壮亮「いや・・・じゃいいよ」

自席に戻る壮亮。

ゆうみ「・・・」

再び自主学習をするゆうみ。

唱「・・・」

○ 流山中学校・外観（夕）

帰りのホームルームのチャイムが鳴る。

○ 3年1組教室（放課後）

ホームルームが終わり、足早に教室を出るゆうみ。

壮亮「(ゆうみを気にしている)」

唱「(ゆうみと壮亮を見ている)」

伊沢「野呂さん」

教壇へ向かう唱。

伊沢「進路についてなんだけど」

唱「あっ」

伊沢「転校してきたばかりで、大変だとは思うけど、願書提出も迫っているから」

唱「決めなきやですよね……」

○ 昇降口（放課後）

下校する唱。すると壮亮が近づいてきて。

壮亮「ちよっといいか」

唱「!？」

○ 河川敷（夕）

江戸川沿い。対面している唱と壮亮。

壮亮「(身体をモジモジさせている)」

喧嘩前のウォーミングアップにも見える壮亮の様子。

唱「(喧嘩？転校生だよ、勘弁してよ……)」

壮亮「……清原と付き合ってるの？」

唱「え」

壮亮「付き合ってるはない？」

唱「うん。え？」

壮亮「でも距離感近けーよね」

唱「それは隣の席だから」

壮亮「その距離じゃねーよ」

唱「……ごめん」

壮亮「てかおまえがどういう状況だって、俺に脈がないことには変わんねえな」

唱「……」

×

×

×

土手に座っている唱と壮亮。

唱「(これは……どういう状況?)」

壮亮「うおおおお……(と悶える)」

唱「大丈夫？」

壮亮「おかしくなりそうだ」

唱「・・・どこが、好きとかあるの？」

壮亮「あ？」

唱「・・・ごめん」

壮亮「・・・自分をちゃんと持つてる感じ。俺にはないから」

唱「そうなんだ」

壮亮「あと大人っぽい感じ。俺にはないから」

唱「うん（まだ言うの？）」

壮亮「あと何考えてるか、俺には分からないミステリアスな感じ。俺にはないから」

唱「うん（どこまで言うの？）」

壮亮「あと目。ほんと目がキレイ」

唱「・・・門間君も目、きれいだよ」

壮亮「あ？」

唱「ごめんごめん、冗談」

壮亮「冗談なのかよ」

唱「でも、いきなり聞いてそんなに好きな所出るのすごい」

壮亮「好きだから。おまえはどうなんだよ、好きな人」

唱「いないよ。転校生だし」

壮亮「関係ねえだろ、気になってる人は？」

唱「いないいない」

壮亮「清原は？気になってもないの？」

唱「え、ないよ」

壮亮「は？今のなんの、え、だよ！」

唱「ほんとに、ほんとに！」

なんだか楽しそうな2人。

○ マンション・エントランスのポスト（夜）

ポストの中を確認するゆうみ。都内の私立高校の願書が届いている。ゆうみの第一志望の高校の願書だ。

ゆうみ「（気が締まる）」

ポストにはもう1枚入っている。見ると、「その悩み、捜査します」というキャッチコピーの探偵事務所のチラシ。

ゆうみ「（軽く見て、横のごみ箱に捨てる）」

○ 唱の自宅・リビング（夜）

台所でどこちなく料理をしている警児。テレビを見ながら、横目で警児のことを気にしている唱。

唱「（大丈夫？・・・）」

警児「おっけーい」

テーブルに料理を並べ始める警児。

警児「ご飯だ、ご飯」

まずはボウル一杯のサラダを出す警児。

警児「緑食えー野菜食え」

唱「こんな食べれない」

警児「いつも食ってないんだから。貯金、野菜の体内貯金」

唱「野菜は貯金にならないよ」

○ ゆうみの部屋（夜）

受験勉強をしているゆうみ。部屋の外から。

ゆうみ母（声）「ごはん、置いとくよ」

ゆうみ「うん、ありがと」

勉強が捗らず、ノートに。ペンで、グシャグシャと

落書きをするゆうみ。

○ 流山中学校・校門近く（深夜）

ある壁を見ている黒ずくめの人物。手にはスプレーなどが入っているカバン。

× × ×

朝。校門横の壁に落書き。人がゴミの山に火を投げ、燃やしているようなグラフィティアート。

× × ×

ゆうみ、通りかかると生徒達の群れ。どンドン集まってくる生徒たち。

「集まってこない！」「教室入りなさい」などと

注意する教師ら。

教頭らと話している警官・緒方。

ゆうみ、落書きを見ていると。

唱「落書きを見て」 うわ

ゆうみ「（唱に気づく）」

唱「落書きのクオリティじゃない。バンクシーのクオリ

ティ

ゆうみ「は？」

唱「知らない？バンクシー」

ゆうみ「だから？」

唱「だからバンクシーに憧れてる人が描いてるのかわつて。それともバンクシー本人？」

校内へ入って行くゆうみ。

○ 美術室（朝）

美術の授業。模造紙にデッサンをしている生徒たち。校門横の落書きを真似るように描いている壮亮。

凜太郎「(壮亮の絵を見て) さっきのじゃん」

漣「壮亮上手っ」

壮亮「バンクシーの模倣だよ」

凜太郎「なにバンクシーで」

漣「バウンデイ？」

凜太郎「それ歌手。怪獣に花唄歌わせる人」

漣「あれって、怪獣を手懐けた歌なの？」

壮亮「画家。バンクシー。正体不明の路上アーティスト」

ゆうみにも聞こえるボリュームで、バンクシー

の雑学を語っている壮亮。

全く気にも留めず、絵を描いているゆうみ。生徒

たちの絵を見ている伊沢。壮亮の絵を見て、立ち

止まる。

伊沢「・・・」

× × ×

唱とゆうみが描いているテーブル。

唱「(ゆうみの絵を見て) 上手いね」

ゆうみ「別に」

唱「(うまく描けず) ああー」

唱の絵を見るゆうみ。

ゆうみ「(リアクションに困る・・・)」

唱「すごいよ、ここからさらに、絵の具でより作品壊れ

ていくから」

ゆうみ「誇ることじゃない」

唱「あの落書きの絵」

ゆうみ「え(描く手が止まる)」

唱「もったいないよな。もっと別の所で描けばいいのに」

ゆうみ「(絵を描き続ける)」

○ 公園(夜)

人目を気にしながら逆上がりの練習をしている  
壮亮。何度もトライしようとするが、恐怖心で回  
ることが出来ない。

唱「何してるの」

壮亮「うおお！？」

×

×

×

鉄棒に寄りかかりながら、話している唱と壮亮。

壮亮「むしろ得意だったんだけど、小3のときに連続逆  
上がりやってたら、頭から落ちたのよ。それ以来出来  
なくなってる」

唱「そうなんだ」

壮亮「今だったら出来るかなと思って、最近練習してる  
んだけど、やっぱり怖いな」

唱「それは怖いよ」

壮亮「絶対言うなよ」

唱「言わないよ。言う人もいないし」

壮亮「清原ゆうみがいるだろ」

唱「え？」

壮亮「仲いいじゃん」

唱「それは席が・・・」

壮亮「近いだけじゃねえよ。おまえらは」

唱「え？」

壮亮「お互い転校生だからかー」

唱「ん？そうなの？」

壮亮「ちようどおまえの1年前だよ。清原が転校してき  
たの」

唱「・・・転校生なんだ」

壮亮「今年クラス一緒になってき。ほとんど話したこと  
無いのにどんどん好きになって」

唱「おお」

壮亮「で、2学期のはじめに席隣になつてさ！だからと言つて、喋れたわけじゃないんだけど、でもペアワークのとき、俺全然できないのに、優しいんだよ！」  
唱「出た、ペアワーク」

話が止まらなくなつていく壮亮。

○ ゆうみの部屋(夜)

勉強の休憩中。ベッドで横になり、スマホでバンクシーの絵を見ているゆうみ。

○ 通学路近くのある道(深夜)

黒ずくめの人物、周囲に人がいないのを確認し、かばんからスプレーを出そうとすると、遠くから人影。

黒ずくめ「!?!」

自転車に乗った警児が向かってくる。

黒ずくめ「(警児に気づき、立ち去る)」

何事もなく、自転車で走っている警児。

○ あるマンションのポスト(深夜)

各ポストにチラシを入れている警児。

○ 唱の自宅・リビング(朝)

寝起きでリビングにやってくる唱。テーブルに突っ伏して寝ている警児。

唱「……」

x x x

制服に着替え、玄関を出る唱。

依然、テーブルに突っ伏して寝ている警児。毛布がかけられている。

○ 3年1組教室（朝）

ホームルーム前。唱の前に来る壮亮。

壮亮「ういすー」

唱「おはよう」

横席のゆうみを意識してしまう壮亮。

壮亮「・・・おまえんちって探偵？」

唱「え？」

チラシを出す壮亮。そこには「その悩み、捜査し

ます」のキャッチコピーのチラシ。探偵会社名は

「野呂探偵事務所」と記載されている。

唱「(チラシの存在を知らず)！？」

壮亮「野呂って。野呂だろ、おまえ」

ゆうみ「(あのチラシ、そうだったんだ・・・)」

唱「・・・父親が探偵なんだよね」

壮亮「すげー」

唱「全然。そのせいで引越したし」

壮亮「引越してきたのは事件とかで？」

唱「いや、親が離婚して。それで」

壮亮「・・・ごめん」

唱「いやいや。親が探偵っていうのもねー」

ゆうみ「・・・」

○ 美術室（朝）

美術の授業。絵を描いている唱とゆうみ。

ゆうみ「家にもチラシ入ってた」

唱「どこまで配ってるんだ・・・」

ゆうみ「探偵ってどんな仕事なの？」

唱「え？浮気、不倫、二股の調査とか」

ゆうみ「それって違いあるの」

唱「知らない」

ゆうみ「将来は探偵になるの？」

唱「え、いやいやいや・・・」

○ 3階建てのアパート・入口（昼）

203号室のポストには「野呂探偵事務所」の表札。

○ 同・唱の自宅・リビング（昼）

依頼主の女性と対面している警児。

警児「では浮気の方・・・」

依頼人「不倫です。主人はそいつと肉体関係を持っています。その証拠を掴んで下さい」

警児「・・・失礼いたしました。では不倫調査というところで進めさせていただきます」

○ 公園（夜）

買い物帰りの唱。公園を横切ると、鉄棒に寄りかかり、うなだれている壮亮を目撃し。

唱「おう」

壮亮「・・・撃沈した」

唱「え？」

×

×

×

ベンチに座っている唱と壮亮。

壮亮「分かってたけどさ、まあ・・・」

唱「すごい」

壮亮「え？」

唱「告白できたことない、俺」

壮亮「俺も初めてだよ。初が撃沈・・・」

唱「告白の成功率って4割らしいよ」

壮亮「なんだよ、その慰めにも嫌味にも取りづらいビミ  
ヨーナ数字」

唱「いや、慰めのつもりで・・・」

壮亮「でも何か、勇気のレベルはかなり上がった気がする」

唱「うん」

壮亮「試合のときの勝負強さも、二段階くらい上がった  
気がする」

唱「いいね」

壮亮「でもやっぱ辛れえああー！（と鉄棒を掴み、勢い  
で逆上がりをする）」

唱「（逆上がりが出来たことに）あ」

壮亮「え・・・今、出来たよな？」

唱「うん」

壮亮「（うれしさで叫ぶ！）」

唱「すごい」

壮亮「告白して、フラれたら、出来た！？」

2人して喜ぶ唱と壮亮。

壮亮「あのさ！・・・」

唱「？」

○ 河川敷（深夜）

高架下の壁に落書きをしている黒づくめの人物。

× ×

横のゴミの山に、ライターで火をつける黒づく  
めの人物。

× ×

燃えるゴミの山。異変から、近くのホームレスが  
テントから出ると

ホームレス「え、あああ！？」

川の水などを利用し、なんとか消火しようとするホームレス。

× × ×

朝。パトカー数台が止まっている。現場検証をしている刑事ら。その中にホームレスに話を聞いている緒方。

壁には、人がゴミの山に火を放っているようなグラフィティアートの落書き。

○ 流山市内・景観（夜→朝）

夜から朝に変わっていく街並み。

○ 通学路近くの道（朝）

制服姿の壮亮。だが学校とは反対の方角に歩いていく。

○ 3年1組教室（朝）

朝のホームルーム中。壮亮の席は空席。

唱「(壮亮のことを気にしてる)」

ゆうみ「(壮亮のことを気にしてる)」

× × ×

授業中。すると窓際の席の凧太郎が。

凧太郎「ん、煙？」

漣「マジじゃん！？火事」

窓に向かう生徒たちの視線。

○ 同・校門近くの道（朝）

道路に面したゴミ捨て置き場から火が出て、燃えている。それは校門横に描かれた落書きと、同じような描写だ。

× × ×  
夕方。スマホで落書きを撮影している女子高生  
たち。それを注意する緒方。

緒方「はい、撮らない！どうせ撮ったって見返さないだ  
ろ！」

「インスタ用だしー」、「今ビリアル来て！」な  
どとふざけてる女子高生ら。

○ 3年1組教室（日替わり・朝）

朝のホームルーム。昨日の放火事件について喚  
起している伊沢。

伊沢「皆さんも気を付けて下さい」

唱「・・・」

ゆうみ「・・・」

× × ×

ホームルーム後。美術室へ向かう生徒達。壮亮の  
所に凜太郎、漣やってくる。

凜太郎「壮亮、昨日どうしたの？」

壮亮「いや、普通に体調崩してさー」

漣「まじか、もうちよいで皆勤賞だったのに」

壮亮「別に狙ってねえし。あんなもん取れば出し。て  
か皆勤賞って必要あるか？」

○ 美術室（朝）

美術の授業。絵を描いている唱とゆうみ。

唱「絵を注目してもらうために、燃やした」

ゆうみ「なに？」

唱「落書き。絵を評価してもらいたくて、でも皆は落書  
きとしか思ってくれなくて、だから落書きの通りに、  
事件を起こした」

ゆうみ「それ推理？やっぱり探偵になりたいんだ」  
唱「……いやあ」

○ 大食堂（昼）

給食の時間。壮亮、凜太郎、漣が喋りながら食べていると。

壮亮「（見られてる？）」

他クラスの生徒から視線を感じる壮亮。

○ 校庭（昼休み）

3人でサッカーをしている壮亮、凜太郎、漣。時より他の生徒からの視線を感じる壮亮。

壮亮「……なんかあった？」

凜太郎「え？」

壮亮「いやあ、すげえ見られてるというか、ザワザワさ  
れてる感じが」

漣「……壮亮、なんで休んだの」

凜太郎「いいだろ……」

壮亮「ん？」

漣「この前、校門近くのゴミ捨て場で放火あった日」

壮亮「ああ、あの日なのか、放火あったの」

漣「壮亮がやったんじゃないかって」

壮亮「え、待て待て。なんで」

漣「描いてただろ、美術の時間。校門前の絵」

壮亮「え？あー、え！それで？」

漣「……じゃあなんでその日休んだの？」

壮亮「それは……体調悪くて」

漣「その日、壮亮がああ、あの辺歩いてたの見たって人もいる  
んだよ」

壮亮「……なんだよそれ」

凛太郎「なわけないだろ」

漣「あいつならやりかねないって、言われてるんだよ」

壮亮「・・・は？どんなこじつけだよ・・・」

険悪なムードの3人。

○ 公園（夜）

公園を通る唱。鉄棒のところには誰もいない。

唱「(壮亮が気になる)」

○ 通学路、ある小売店（夜）

シャツターに描かれた落書きを見ている唱。

○ 河川敷（夜）

壁の落書きを見ている唱。

○ トンネル内（夜）

トンネルの壁に描かれた落書きを見に来た唱。

するとそこには、落書きを見ている伊沢。

伊沢「(唱に気づき) 野呂さん？」

唱「あ・・・こんばんは」

伊沢「こんばんは。何してるの？」

唱「散歩してて・・・先生は？」

伊沢「これから帰るところ。少し気になってしまってます・・・」

唱「え？」

伊沢「いや、美術をやっている端くれとして、見入って

しまつて・・・よくないね、落書きなのに」

唱「・・・」

伊沢「もう遅いから、野呂さんも気を付けて」

唱「・・・はい」

○ 大食堂（昼）

給食の時間。黙々と食べている壮亮。

凜太郎「(壮亮を気にしている)」

漣「(壮亮を気にしている)」

ゆうみ「(壮亮を気にしている)」

唱「(壮亮を気にしている)」

○ 廊下（昼休み）

教室へ向かっている壮亮、凜太郎、漣。通り過ぎる生徒たちの視線が気になってしまふ壮亮。

壮亮「(皆が自分の噂をしているような感覚)」

凜太郎「気にすんな」

漣「・・・」

漣、SPが警護対象者を守るような立ち位置になり、壮亮を生徒達の目線から隠す。

漣「おれSP向いてるかもなー」

凜太郎「あ、SPなんだ。コミケの行列を規制してる係

員さんかと思った」

漣「おまえぶっ飛ばすぞ！」

壮亮「(ありがとう)」

○ 美術準備室（放課後）

壮亮の描いた絵を見ている伊沢。

伊沢「・・・」

○ 校門近くの道（夜）

茂みから校門を見ている唱。全身黒ずくめでマスクをしている。巡回中の緒方、不審者だと思  
い、声をかける。

緒方「こんばんは、ちょっといいですか」

唱「(緒方に気づき、マスクを外し)」

緒方「おお！君か」

唱「・・・張り込んでるんです」

× ×

スナック菓子を食べて、伊沢が出てくるのを待  
っている唱。

× ×

受験勉強として教科書を読みながら、伊沢を待  
っている唱。だがすぐ飽きる。

× ×

眠気と寒さに耐えながら、伊沢を待っている唱。  
すると校門から出てくる伊沢。

唱「(ようやく！?)」

時計を確認すると、時刻は21時。

唱「(こんな時間まで・・・)」

○ 通学路／駅までの道のり(夜)

駅へ向かう伊沢を尾行している唱。

× ×

壁のグラフィティアートの落書きで立ち止まり、  
見ている伊沢。その姿を見ている唱。その後  
で、唱を追う人影。

○ 駅前(夜)

伊沢を尾行している唱。すると。

男「なにやってんだ」

唱、振り返ると、自転車に乗った警児。

唱「うわ!？」

警児「せめて自転車で尾行してる奴には気づけ」

唱「うるさい」

警児「(伊沢を見て) 探偵ごっこか、あの人は違う」  
唱「なにが？」

警児「感覚で分かる」  
唱「え？」

警児「肌感覚で分かる」  
唱「なにそれ」

警児「ご飯作ったから、帰るぞ」  
唱「・・・」

警児「いいから。ご飯作ったから」

帰路へ向かう唱と警児。ふと後ろを振り返る伊沢。

伊沢「・・・」

○ 3年1組教室(昼休み)

自席で話している唱とゆうみ。

ゆうみ「先生、尾行したの？」

唱「尾行っていうか、なんというか・・・」

ゆうみ「尾行。はっきり言うトストーカー」

唱「・・・」

ゆうみ「なんで知り合いの中から犯人探しするかな。探偵とか、中学生とかって」

唱「え？」

教室に入ってくる壮亮にザワザワする数名の生徒。

壮亮「(視線を感じるが、気にしない)」

ゆうみ「人の噂だけで事実って決めつけるの、ほんと悪だよ」

唱「・・・」

○ 通学路、ある小売店(放課後)

歩いている唱。途中、シャッターの落書きを消している店主を目撃する。

唱「・・・」

唱、一度は通り過ぎるが引き返して。

唱「あの・・・」

店主「はい？」

唱「手伝えることありますか」

×

×

×

店主と一緒に落書きを消している唱。

店主「ありがとうね」

唱「いえ」

×

×

×

夜。シャッター前を通りかかる黒ずくめの人物。  
黒ずくめ「!?!」

落書きはかなり消えている。

黒ずくめ「(怒り)」

○ 唱の自宅・リビング(夜)

「ご飯を食べている唱と警児。

唱「・・・あのさ」

警児「？」

唱「・・・犯人、どうやったら捕まえられる？」

警児「ん？何を言ってるんだ」

唱「同級生、疑われてるんだ」

警児「・・・」

○ 流山中学校・校門(日替わり・夕)

校内へ入ろうとする警児。校門前には警備員。

警備員「ご用件は」

警児「探偵です」

警児を止める警備員。

警児「あ、(保護者プレートを出し)保護者です」

○ 応接室(夕)

伊沢、教頭、警児が話している。

「探偵 野呂警児」と書かれた名刺を見ている

教頭と伊沢。

警児「野呂警児です。探偵です」

教頭「・・・」

警児「探偵です」

教頭「分かりました」

警児「あ、名前が警児(刑事)なので、混同してしまう

方もいて、探偵と2回言いました」

教頭「はい」

警児「あ、3年1組の野呂唱の親です」

伊沢「いつもお世話になっております」

教頭「で、お問い合わせていただいた件ですが」

警児「予言の落書きの件、私の方でも調査できればと思

いまして」

見積書を提示する警児。

教頭／伊沢「・・・？」

警児「校門横の落書きも拝見しました。一刻も犯人を捕

まえないと、より被害は深刻に」

教頭「(見積書を指し)「これは？」

警児「通常の見積もりよりも、だいぶお値引させてもら

っています。息子が通ってるのもありますし」

教頭「ん、私たちに営業をします？」

警児「営業って言い方はー。世間的に見るとそうかもし

れません。ただ、ココとココの間柄があるからといっ

て、ボランティア的な関わりをすると、逆に関係性が

崩れることってあるじゃないですか。友人同士だったのに、いや友人同士だからこそ、対価を曖昧に、仕事絡んだ関わりをした途端、関係性が崩れて、二度と・・・」

教頭「私とあなたは友人ではないですよ」

警児「それは・・・そうですよね」

教頭「はい」

○ 昇降口（夕）

唱、帰ろうとすると、職員出口から出てくる警児を見かけ。

唱「え！？」

警児「（唱に気づき）おお」

唱「なにしてるの？」

警児「調査だよ、調査。予言落書き事件の」

唱「・・・営業したでしょ、学校に」

警児「んん？」

唱「やめてよ、恥ずかしいなー」

そこに通りかかるゆうみ。

ゆうみ「（唱と目が合い）え・・・じゃあ」

唱「じゃ・・・また明日」

警児「（話を逸らすように、ゆうみに）お友達？」

ゆうみ「え・・・はあ」

○ 通学路～自宅までの道（夕）

歩いている唱、ゆうみ、警児。

警児「隣の席なのか、唱の」

ゆうみ「はい」

警児「迷惑かけられてない？こいつ勉強できないし、しないから」

唱「いいから」

ゆうみ「まあ」

警児「だよね、ごめんね、しかも受験もあるこんなタイ  
ミングに転校してきて」

唱「それは父さんのせいだろ」

警児「・・・すまない」

ゆうみ「・・・私も転校生なので。1年前にですけど」  
警児「そうなのか。唱と仲良くしてくれてありがとうね」

分かれ道。

ゆうみ「私こっちなので」

警児「よかったらお茶でも。お菓子出すよ」

ゆうみ「え」

唱「(警児に) もういいから」

警児「転校してから、唱が家に友達呼ぶなんてことまだ  
ないから」

ゆうみ「・・・」

警児「それに探偵事務所、入ったこと無いでしょう」  
ゆうみ「・・・まあ」

○ 3階建てのアパート・入口(夕)

歩いている唱、ゆうみ、警児。

203号室のポストに「野呂探偵事務所」の表  
記。

○ 同・野呂探偵事務所(夕)

(室内は唱の自宅・リビングと部屋と全く同じ)。  
棚には「名探偵コナン」、「金田一少年の事件簿」  
など、探偵モノの漫画がずらりと並んでいる。眺  
めているゆうみ。

ゆうみ「(探偵漫画しかない・・・)」

警児「どう」 × × ×

事務所宣伝用の自撮り動画をゆうみに見せる警児。

ゆうみ「・・・どうなんですかね」

唱「それ聞きたかったから呼んだんだろ」

警児「まずはアカウント作って、この動画を流そうと思ってるんだ」

ゆうみ「すいません、私も疎いので」

警児「そうかい、でもこんなの流したところで、タピオカ飲みながら踊ってみた動画に埋もれて終わりだよな」

唱「変に混ざってるから。タピオカと踊ってみたは別だから」

警児「それに、いくらクオリティが良くても、既に世の中にあるもの作っちゃ、世間にとっては必要ないモノなんだよ。だって私が iPhone を自作で作れても、需要ないだろ？」

唱「え、なに？」

警児「世間が必要としてる、違うモノを生み出さなきゃ。バンクシーに似たモノ描いたって、そりゃ評価されない」

ゆうみ「・・・」

警児「これはアイツに言ったんだよ、予言落書きの犯人」

唱「んどういうこと？」

警児「私も頑張るべきところは、ティックトックではないいな」

唱「・・・」

ゆうみ「・・・」

○ 公園（夜）

連続逆上がりをしている壮亮。買い物帰りの唱、通りかか。

唱「壮亮」

壮亮「おおっ」

×

×

×

ベンチに座っている唱と壮亮。

壮亮「逆上がりだけが、今の俺の気分転換」

唱「・・・言わなくていいの？」

壮亮「え」

唱「言ったら誤解、解けると思う」

壮亮「でもな・・・」

公園内を通りかかるゆうみ。

唱「あ」

壮亮「あ」

ゆうみ「（2人に気づいて）あ」

×

×

×

ベンチに座っている唱とゆうみ。鉄棒に寄りかかっている壮亮。

唱「今日ごめんね。父さん、意味わかんなかったでしょ」

ゆうみ「いえいえ」

壮亮「え、何？」

唱「今日家来てくれて。いや入れてしまつて」

壮亮「おまえら！？ズブズブじゃねえか」

ゆうみ「色々意味履き違えてる」

唱「うん、ほんとに！」

壮亮「・・・まあ、もう俺なんか・・・犯人候補にもなつてるし」

ゆうみ「それさ、ほんとクソだよ。言ってる奴らが」

壮亮「・・・ありがとう。でも一度言われちゃったら、

もう消えないからさ」

ゆうみ「……大丈夫、この人探偵だから」

唱「え！？……うん、俺は壮亮がやってないの知ってるし」

自転車に乗った警児、唱を見つけて。

警児「唱！」

壮亮「……誰？」

唱「父さん……」

壮亮「え！？探偵の！」

警児、やってきて。

警児「買い物行ってくて言つて、全然帰つてこないから。

ご飯作つて待つてるのに」

ゆうみ／壮亮「こんばんは」

警児「お、ゆうみちゃん。さっきはどうも。(壮亮を見て)

君も唱のお友達？」

壮亮「はい！」

唱「(うれしい)」

警児「(壮亮に)いつもありがとうね。(唱に)帰るぞ、

ご飯作つたんだから」

唱「はいはい」

警児「皆も夜遅いから、帰りは気を付けて」

それぞれの方向へ帰っていく面々。

○ トンネル内／家の近く(夜)

家へ向かって歩いているゆうみ。トンネル内に人影。落書きの色落ちした部分を、スプレーで塗り足している黒ずくめの人物。

ゆうみ「え……」

目が合うゆうみと黒ずくめ。来た道を引き返すゆうみ。すると付いてくる黒ずくめ。

ゆうみ「!?!」

走って逃げるゆうみ。

○ 暗い路地（夜）

依然、走って逃げるゆうみ。途中、階段の段差で足を滑らせ、転倒する。

ゆうみ「!?!」

立ち上がろうとするが、足を捻ってしまい、中々立ち上がれない。巡回中の緒方、数十メートル先のうずくまっている人影を確認し、自転車で直行。

緒方「(ゆうみに)大丈夫か!?!」

震えているゆうみ。

○ 3年1組教室（日替わり・朝）

朝のホームルーム。連絡事項を伝えている伊沢。

ゆうみの席は空席。

唱「……」

伊沢「このところ物騒な事件が増えています。特に夜間は気を付けるように」

×

×

×

ホームルーム後。伊沢に駆け寄る唱。

唱「先生」

伊沢「うん」

唱「清原さんって……」

○ 通学路（ゆうみの家の近く（放課後））

分かれ道。一方を曲がれば、ゆうみの家だが。

唱「……」

もう一方を曲がり、自身の家へ向かう。

○ ゆうみの部屋（夕）

受験勉強をしているゆうみ。  
手と足数箇所には包帯をしている。

○ 流山中学校・校門前（朝）

天候は雨。登校しているゆうみ。

○ 3年1組教室（日替わり・朝）

教室に入ってくるゆうみ。未だ包帯をしている箇所はある。生徒達の視線がゆうみに集まっている。

自席に着席するゆうみ。

唱「おはよう」

ゆうみ「おはよ」

×

×

×

朝のホームルーム後。ゆうみに駆け寄る壮亮。

壮亮「……大丈夫？」

ゆうみ「……うん、ありがとう」

ゆうみに話しかけた壮亮に、ザワザワしている数名の生徒。

生徒1「（小声で）フラれたから、突き飛ばしたってマジ？」

生徒2「（小声で）それに落書きに注目してほしいから、

火までつけたんだろ。承認欲求すげえな」

凛太郎「（大声で）なら本人に直接聞けよ」

漣「それ誰が言ってるの？」

生徒1「おれらも噂回って聞いただけで……」

壮亮「……」

ゆうみ「……門間君じゃなよ。姿分からなかったけど、  
もっと全然大人な感じした。それに突き飛ばされたん

じゃなくて、追いかけて転んだの」

生徒1「……でも休んだ日にゴミ捨て場の近くで見かけたって……」

壮亮「あの日休んだのは……オーディション受けて……芸能事務所の」

一同「!?!」

壮亮「……中学卒業したら、俳優になりたいくて……

それで……ここなら受かるかもって事務所受けたら、その場で不合格って言われて……学校休んで受けたのに、落ちたの恥ずかしくて……言えなかった」

一同「……」

壮亮「それで休んだんだよ……」

凛太郎「その場で不合格言われるって……ロクな事務所じゃねえ、クソ事務所だろ」

漣「……落ちてよかった!落ちるべきだった!」

壮亮「え……」

唱「当日に可否出す芸能事務所は、レッスン料とかのお金目当てだから、受かっても気を付けろって、前の学校の先生も言ってた」

漣「すげーな!その先生!」

凛太郎「どんな学校だよ」

込み上げる想いが溢れる壮亮。

○ 流山中学校・外観（昼夕）

雨が止み、陽が差し込む。そして夕方になり、帰りのチャイムがなる。

○ 3年1組教室（夕）

ホームルームが終わり、下校していく生徒達。自席で考え込んでいる唱。

ゆうみ「・・・帰らないの」

唱「うん、ちよっと」

×

×

×

誰もいない教室。

ひとり、考え込んでいる唱。

○ 唱の自宅・リビング（夜）

防寒着に着替え、玄関に向かう唱。

警児「どこいくんだ」

唱「ちよっと、散歩」

警児「・・・気を付けて行けよ」

唱「・・・うん」

○ 路上く小売店く河川敷く校門前（夜）

それぞれの場所で描かれた落書きを見ている唱。

時折、唱の後ろに人影。

○ トンネル内（夜）

23時過ぎ。壁の落書きを凝視している唱。する

と

警児「この時間に、中学生が1人での外出は禁止だ」

振り返るとそこには警児。

○ トンネル近くの茂み（夜）

茂みから、トンネル内の人通りを覗いている唱

と警児。

警児「なぜここなんだ」

唱「清原が言ってた。犯人は、ここの落書きの色を塗り

足そうとしてたって」

警児「うん」

唱「犯人は絵を注目してもらいたい。だから絵の通りに  
燃やしたりした」

警児「うん」

唱「えっと・・・他の場所の絵も見たら、クオリティは、  
どんどん落ちてきてる気がする」

警児「警戒されて、絵にかけられる時間も減ってるだろ  
う」

唱「うん。犯人の中では、この絵は特にお気に入りな  
んだよ。だから絶対にまた来る」

警児「(いい推理だな)」

× × ×

数時間後。トンネル内を見ている唱と警児。

唱「寒っ」

ホッカイロ数枚を唱に渡す警児。

警児「ホッカイロは張り込みの基本だ」

唱「あんまり路上で張り込みしてるの、聞いたことない  
けど。普通、車の中じゃないの？」

警児「それは物語の中の探偵だ。それに車売っちゃった  
し。これが現実」

唱「・・・」

警児「唱、ごめんな」

唱「え」

警児「迷惑かけて・・・ごめんな」

唱「・・・うん・・・誰か来る？」

警児「？」

トンネル内に入って来たのは、蛍光色のパトロ  
ールベストを着た伊沢。

× × ×

落書きを見ている唱、警児、伊沢。

伊沢「見回りといいですか、生徒も巻き込まれているの

で」

警児「すみません、うちの息子が疑ってみたいいで」

唱「・・・すみません」

伊沢「いえ・・・じゃあやっぱりお2人ですか？先日、僕のこと尾行してたの？」

唱「え、気づいてたんですか!？」

警児「それも息子が。すみません」

伊沢「いや、僕も唱さんと偶然会った時に変な対応をしてしまったので」

警児「そうなんですか」

伊沢「実は昔、一緒に絵をやっていた子がバンクシー好きで。その子もバンクシーを模倣したような作品を描いてて」

警児「ほお」

伊沢「その子を思い出してしまって。あ！その子が犯人かもって訳では！気になってフェイスブック調べたら、海外で結婚して暮らしてました」

警児「あ検索したんですね」

伊沢「・・・しちゃいました」

警児「忘れられない片想いってありますよね」

唱「・・・。(警児に) ねえ?」

落書きの絵で立ち止まる黒ずくめの人物。手に

はカバン。

目配せをし合う唱、警児、伊沢。

黒ずくめ「(落書きをじっと見ている)」

唱「・・・どうなの」

警児「・・・まだだ、確証がない」

カバンに手をかける黒ずくめ。

唱／警児／伊沢「!?!」

その時、警児のスマホからメール着信音が鳴る。

茂みの方を向く黒ずくめ。

警児「・・・うわお」

唱「なんでマナーモードにしてないの！探偵だろ！」

警児「何時も依頼メールを確認できるように」

唱「でもこういう時は別じゃん！」

警児「・・・ああっ！」

茂みから出る一同。黒ずくめと対面し。

黒ずくめ「(気づいて)！？」

警児「突然すみません、探偵です」

黒ずくめ「はい？」

警児「お仕事帰りですか」

黒ずくめ「はあ？」

警児「最近落書きや放火の事件起きてるじゃないですか。

それでパトロールしてまして」

黒ずくめ「・・・」

警児「失礼ですが、かばんの中を見せてもらえませんか」

黒ずくめ「なぜ？」

警児「調査の一環です」

黒ずくめ「・・・任意ですか」

警児「探偵の調査には、任意は無いんですよ」

黒ずくめ「任意が無いなら、人のことは調べられないで

すよね？」

警児「(この野郎)」

黒ずくめ「帰るところで。いいですか」

警児「・・・」

伊沢「・・・あの」

黒ずくめ「(伊沢を睨む)」

伊沢「えっと・・・その・・・上着の袖」

黒ずくめ「あ？」

伊沢「絵描いてる人って、服に色がついてしまうじゃな

いですか。洗濯すれば落ちる事もありますか」

警児「(伊沢に)大丈夫か？」

伊沢「でも特に袖の裏って、ほんとに落ちない箇所なんですよ」

自身のシャツの裏地を見せる伊沢。絵の具汚れが軽くついている。

唱「ほんとだ・・・」

自身の袖に、目線が行く黒ずくめ。

伊沢「もし描いてないなら、色なんて付いてるはずがないんです」

警児「私より探偵らしいじゃないか・・・」

伊沢「袖裏だけでも見せてもらえませんか」

黒ずくめ「・・・」

伊沢「うちの生徒、巻き込まれてるんです」

黒ずくめ「・・・」

警児「カバンか袖裏、どちらかでいいんで見せ・・・」

突如、走り去る黒ずくめ。

一同「!?!」

追いかける面々。

### ○ 道 (深夜)

黒ずくめを追っている一同。

唱「(こつちの道なら先回りできる!)」

迷うことなく走る唱。流山の街を知った証である。

× × ×

黒ずくめを追いかける一同。遂に三方に囲み、追いつめる。すると刃物を出す黒ずくめ。

唱「え・・・」

唱の方に対面する黒ずくめ。

警児「唱！」

刃物を突き出し、唱へ向かって走る黒ずくめ。

唱「!？」

黒ずくめ「(何かに気づき)！？」

自転車に乗った緒方が黒ずくめに突進。

黒ずくめ「(崩れ落ちる)」

黒ずくめを取り押さえる緒方。

緒方「(唱に)大丈夫か!？」

唱「はい……」

緒方、黒ずくめのマスクを取ると、誰も見覚えの

ない男・高橋(46)。

高橋「評価しろよ……平等に見ろよ……なんで俺だ

け……(と呟く)」

無線で各位に連絡する緒方。

唱「(まだ少し呆然としている)」

警児「(唱に)大丈夫か、ごめんな」

緒方「23時以降の青少年の外出は、条例で禁止されて

ます……。今回は正当な理由があったとはいえ……」

唱「……ごめんなさい」

緒方「でも、ちゃんとした大人も同伴していたので」

警児「ありがとうございます」

伊沢「ご迷惑おかけしました」

緒方「(伊沢を見て)ん?あれ……」

伊沢「(緒方の反応に)え?……」

近づいてくるパトカーのサイレン音。朝日が出

かかっている。

警児「(朝日に対して)うわお」

伊沢「朝……あ、野呂さん、学校……行ける?」

唱「はい、行きます」

○ 通学路（朝）

学校へ向かっているゆうみ。

○ 流山中学校・校門前（朝）

ゆうみ、歩いていると、校門前に唱が立っている。  
て。

唱「ゆうみに気づいて、ガッツポーズ」

ゆうみ「（ありがとう）」

○ 流山市内・景観（日替わり）

○ 受験会場（日替わり・朝）

試験を受けているゆうみ。（包帯は全てとれてい  
る）

○ 唱の自宅・リビング（日替わり・昼）

PCで通信制高校・D校の入試結果を見ている

唱。画面には「合格」の表示。

唱「おっ・うおお・っしやあー」

○ 通学路くトンネル内（日替わり・昼）

学校の帰り道。唱、歩いていると、巡回中の緒方  
がやって来て。

緒方「もう学校終わり？」

唱「明日、卒業式なので」

緒方「おお、卒業おめでとう」

唱「ありがとうございます」

緒方「早いねー、もう卒業か」

唱「そもそも、まだ会って2ヶ月ですよ」

緒方「そうだった、転校生。ねえ、君の先生の名前って、

伊沢先生？」

唱「はい。え？」

○ ゆうみの部屋（日替わり・朝）

3月17日。卒業式当日。制服にスカーフを通して  
いるゆうみ。壁掛けカレンダーの3月17日  
を見ている。

ゆうみ「・・・」

○ 通学路くある小売店前（朝）

学校へ向かって歩いている唱。

途中、車道を挟んだ先で、店主が緒方に感謝して  
いる光景を目撃する。

○ 通学路く流山中学校前（朝）

唱、歩いていると。後ろから壮亮が。

壮亮「おう」

唱「おはよう」

×

×

×

学校へ歩いている唱と壮亮。

壮亮「あっという間だったな」

唱「ほんとに」

壮亮「・・・おまえいなかったらさ、こんな感じで、絶  
対卒業できてなかった」

唱「・・・」

壮亮「ありがとうな」

唱「こちらこそ」

○ 体育館（朝）

卒業証書の授与が行われている。

× × ×  
保護者席にスーツ姿で座っている警児。その横には、唱の母で警児の元妻・南野恵（50）。

警児「ありがとうな」

恵「唱にご飯ちゃんと食べさせてる？野菜食べろとか言  
って、ポウル一杯の生野菜出してないでしょうね」

警児「(凶星・・・)」

× × ×

壇上。卒業証書を受け取る唱。

× × ×

卒業生が退場している。拍手で送っている在  
生や保護者ら。途中、保護者席に恵がいることに  
気づく唱。

唱「(恵に)！？」

唱に向かって、より強い拍手を送る恵。

唱「(ありがとう)」

○ 3年1組教室（昼）

式後。話している唱と伊沢。

伊沢「卒業おめでとう」

唱「2カ月にしては濃い生活でした」

伊沢「先生も2か月とは思えないよ」

唱「そうだ、先生も初日遅刻勢だったんですね」

伊沢「ん？」

唱「お巡りさんが言っていました。教育実習初日に遅刻し

たのは、流山中の教育実習生史上初だって」

伊沢「どうして！？え？お巡りさん？」

ゆうみを見かける唱。

唱「あ、また顔出しますね！」

ゆうみの方へ向かう唱。

伊沢「ちよ・・・あの警官の子！（と思い出し）・・・警官になったのか」

嬉しそうに唱の姿を見ている伊沢。

○ 昇降口（昼）

卒業生や保護者で賑わっている。校門へ向かっているゆうみ。追いかける唱。

唱「（追いついて）帰るの？」

ゆうみ「喋る人いないし」

唱「俺も」

ゆうみ「・・・」

唱「・・・」

○ 通学路〜家までの道（昼）

歩いている唱とゆうみ。

ゆうみ「・・・ちよっと喜んでいい？」

唱「え？」

背伸びをし、思わず声を上げるゆうみ。

ゆうみ「地獄終わったー」

唱「・・・」

ゆうみ「あ、ずっとこの日待ってたの」

唱「そうなんだ」

ゆうみ「不登校になろうとも思ってたけど、でもその分耐えたら、この日の快感、最高かとも思ってた」

唱「うん・・・」

ゆうみ「超快感、あー！」

唱「（ゆうみの姿に驚いている）」

ゆうみ「でも」

唱「？」

ゆうみ「最後の2ヶ月は早く感じた」

唱「・・・そうなんだ」

ゆうみ「ありがとう」

唱「え」

ゆうみ「探偵になったら教えて。何かあったら依頼するね」

唱「まだなるって決めたわけじゃ・・・」

ゆうみ「そのときは割引よろしく」

唱「なんで」

ゆうみ「ココとココの関係性で」

唱「そこは依頼人と探偵の関係性だから」

ゆうみ「けち」

唱「てか、だったらさ・・・あれ・・・連絡先・・・」

ゆうみ「あ交換？いいよ」

唱「お、おう」

ゆうみ「でも紙とペン」

唱「・・・あ！」

卒業品のボールペンと、卒業アルバムのメッセー  
ージ欄を見せる唱。

ゆうみ「おお」

お互いの卒業アルバムのメッセー  
ージ欄に連絡先  
を書き合う唱とゆうみ。

ゆうみ「この欄を使う世界線が私にあるとは」

唱「同じく」

お互い、連絡先を書き終わり。

ゆうみ「またね」

歩き去っていくゆうみ。どんどん遠くなってい  
くゆうみの姿。唱、走って近づき。

唱「絶対なるから！（叫ぶ）」

ゆうみ「・・・（振り返って）うるさい！」

再会を予感させる2人の姿。

唱 M 「これが探偵になったきっかけ」  
タイトル 「中学生探偵日記」